

なぜ花崗岩のことを御影石というのか？

先山 徹 (NPO 法人地球年代学ネットワーク・地球史研究所)

1. 「御影石」についての疑問

石材によく利用される岩石に花崗岩がある。花崗岩は石英・カリ長石・斜長石を多く含んだ粒の粗い岩石で、身近なところでは六甲山地でよく見られる。筆者は人と自然の博物館を退職後、各地に分布する歴史的石造物を対象に、その岩石種や産地の同定を行い、その結果六甲山地や瀬戸内各地の花崗岩製の石造物が各地に流通していることが明らかになってきた。この研究を進める過程で生じた疑問が「なぜ花崗岩のことを御影石というのか？」であった。花崗岩は俗に「御影石」と呼ばれ、特に石材を扱うときにはその傾向が強く、全国どこの花崗岩であっても「御影石」である。花崗岩という名称は明治時代になって西洋から入って来た granite という英語名の岩石に対してつけられた日本語名で、それ以降地学の教科書では花崗岩と呼ぶことに決められた。それでも「御影石」という名称が利用されたのは、「御影石」という呼称がそれ以前からあり普及していたからだと考えられる。

歴史的に見ると「御影石」というのはもともと六甲山地の花崗岩のことであり、その名称は神戸市東灘区の御影に由来している。そんな「御影石」がなぜ全国の花崗岩を指すことばになったのだろうか？ 特定の岩石が各地に出回る過程を考えると、①そこで採れる石材が他と比べて美しい、あるいは立派な石が採取できるなど、優れた特質を持っていること、②他地域と比べて大量の石材を産出していたこと、などが考えられる。そこで六甲山地に目を向けた時、そこで採れる花崗岩は素晴らしい石だろうか？たとえば大坂城の石垣では、最大の石である蛸石が犬島産の花崗岩であるなど、目立つところの立派な石の多くは瀬戸内の島々から運ばれており、六甲山地の花崗岩はあまり目立つところに配置されていない。このように、六甲山地の花崗岩は他と比べて取り立てて優れた石だったとは考えにくい。六甲山地に入ると特に南東麓に石を割ろうとした痕跡のある岩塊が多くみられ、大量の石材が採取されたことがわかる。これらは徳川家による大坂城築城のための採石場だったとされているが、そのような採石場跡地は小豆島や尾道など瀬戸内の他地域にもあり、六甲山地を特別視する理由にはならない。「御影石」という名称が全国に伝わるためにはもっと別の理由があったと考えられる。

2. 六甲山地と瀬戸内各地の石材の流通

これまでの研究で六甲山地の花崗岩は鎌倉時代から各地に流通していたことがわかってきた。また、江戸時代から明治時代にかけて就航した北前船では、瀬戸内の花崗岩類が大量に日本海沿岸地域に運ばれた。このうち六甲山地の花崗岩とそれ以外の花崗岩について、山陰から北陸地域にどの程度運ばれたかを示したのが図1である。これによると、鎌倉時代から安土桃山時代にはもっぱら六甲山の花崗岩のみが流通していた。江戸時代に入ると徳川大坂城築城をきっかけに瀬戸内各地の石材が加わり始める。それらは北前船が盛んになるにつれて増加していくが、六甲山地の花崗岩はそれほど増加せず、石材の主体が他地域のものに変わっていったことを示している。それではなぜ、江戸時代



写真1 六甲山地に残る石割の痕跡



写真2 六甲山地の花崗岩製五輪塔(島根県益田市)

より前には六甲山地の花崗岩のみが流通していたのだろうか？

3. 日本山海名産図会

「御影石」に関することは、江戸時代いくつかの図会に記述されている。そのうち 1799 年に発行された日本山海名産図会を見ると「御影石」という項目があり、当時の状況が詳しく書かれている。それを読むと、まず「海岸に面した御影村の石工が製品を作り、積みだしていたことから御影石と言うようになった」ことが書かれている。この時点で「御影石」は六甲山地の岩石のことを指している。さらに読み続けると「山麓の石は取りつくされて、より奥山深くに入って採石している」こと、「昔は牛車など使わなかったのに、今は牛車を使って御影村まで運んでいる」ことが書かれている。このことは、それ以前には積出地の御影村近くで石が取れていたことを物語っている。露頭が存在したと思えない海岸近くで、どのように採石していたのだろうか？

考察—土石流が運んだ石材—

六甲山地南麓の阪神間には、これまで何回となく土石流災害に襲われている。その代表的なものが 1938 年の阪神大水害である。この時には山麓の各地で土石流が発生し、大きな岩塊が転がっている様子が当時の写真に残されている。明治時代の地形図を見ると、六甲山麓の住吉川流域に顕著な扇状地があることがあり、御影村はその末端に位置する。このことは、この地域の大地が繰り返し発生した土石流によって形成されたことを示している。そう考えると、かつての御影村周辺には土石流で運ばれた岩塊が無数に散在していたと想像される。各地の採石場が開発される以前の鎌倉～安土桃山時代、六甲山麓では海岸近くに大きな岩塊が存在しており、容易に運搬・加工され、港から各地に積み出されていた。このことが各地の石材に先駆けて六甲山地の花崗岩が流通することにつながり、「御影石」という名称が全国に広まることにつながった。江戸時代になると各地の石材は大坂に集積され、そこから全国に出回るようになった。そうなる個々の産地の独自性は薄れ、それまでに存在していた「御影石」という名称だけが記憶に残り、他の類似した石材はすべて「御影石」と呼ぶようになったと推察される。「御影石」というブランドは崩れやすい花崗岩からなるうえに断層運動で急傾斜となった、六甲山地の地形と地質が生みだしたものとみえる。

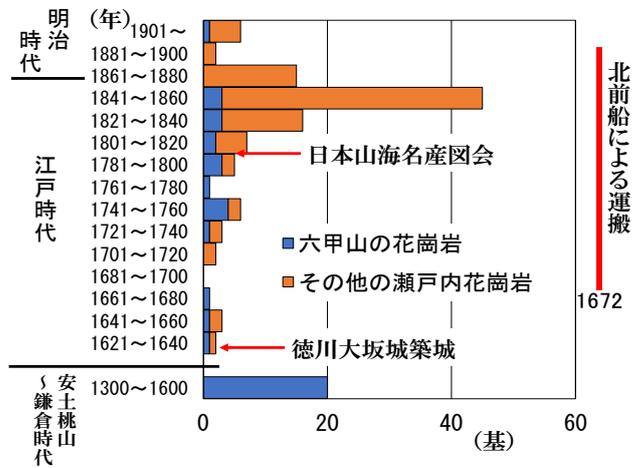


図1 日本海沿岸(山陰～北陸)に分布する瀬戸内海産花崗岩製の石造物

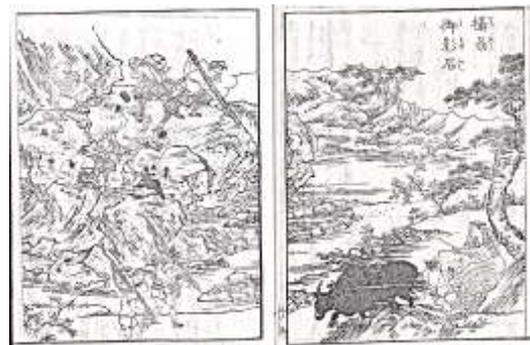


写真3 日本山海名産図会(国文学資料館『古典籍データセット(第0.1版)』)